

使徒、遣わされた人々

マタイ9:35~10:8 / 李正雨師

私たちが持っている聖書は、大きく旧約聖書と新約聖書に分かれています。旧約聖書には、この世の創造と選ばれた民を中心とした神様の歴史、文学、預言などが記録されており、記録された過程や歴史も非常に長いです。それに反して、新約聖書では、選ばれた民が中心になるのではなく、異邦の人々が中心になっています。様々な国と民族に広がっていく神様の言葉と宣教の過程、教会への教え、黙示文学などが新約聖書に書かれています。そして、この過程での重要な人物は、メシアであるイエス様と使徒という人々です。この使徒という言葉は、メシアの登場を知らせる福音書から出ます。ルカによる福音書と使徒言行録ではたくさん書かれており、マルコによる福音書とマタイによる福音書では、ただ一度だけ書かれています。そして、その一度が今日の福音書であるマタイによる福音書10章2節に書いてあります。そこには、使徒たちの名前が書かれていますが、それはイエス様の弟子たちの名前です。それで、一般的に使徒と言えば、イエス様が直接招かれた12弟子を思い出すこととなります。では、聖書での使徒は、イエス様の十二弟子だけを指しているのでしょうか。必ずしもそうとは言えません。使徒言行録14章14節にも、使徒という言葉が出て来ますが、使徒として紹介された人々は、12弟子以外の人々でした。使徒言行録14章14節の言葉です。「使徒たち、すなわちバルナバとパウロはこのことを聞くと、服を裂いて群衆の中へ飛び込んで行き、叫んで言った。」

このように、十二弟子だけが使徒と呼ばれてはいませんでした。バルナバとパウロも当時の使徒として呼ばれていました。これは、使徒という言葉がイエス様の十二弟子のみを称するのではなく、特別な意味を持って、初代教会の中で使われたということを示すことだと思います。個人的な考えですが、このバルナバとパウロ以外にも、新約聖書に書かれていない使徒たちがいたかもしれないと思います。この使徒という言葉は、ギリシャ語で「アポストロス(ἀπόστολος)」と言います。この言葉の意味は「遣わされた者、派遣された者」という意味として、当時は主に航海者を示すときにこの言葉が使われたそうです。動詞「アポステロ(ἀποστέλλω)」が王などの指導者から遣わされて航海するという意味を持っているからです。そのため、このアポストロス(ἀπόστολος)には、遣わす者の命令と送る目的が与えられます。これを私たちは、よく「使命」と言いますよね。使命が与えられ、遣わされた人。その人が使徒、アポストロスなのです。この言葉は、当時のユダヤ人の歴史家であるヨセフスも使いました。海を渡ってローマに遣わされたユダヤ人の使節団(emissary)を「アポストロス」と称したそうです。

今日の福音書10章2節では、この使徒たちが登場します。そして彼らは使徒であるため、彼らに与えられた命令、つまり使命もあります。その言葉は今日の福音書5節以下に書いてありますが、この使命については、後で取り上げてみます。まず、イエス様が12弟子たちをお遣わしになったことと、使徒という名前で送られた目的について調べてみる方が順番的に良いと思います。今日の福音書は、イエス様の公的な活動がどうだったかを教えてくださいることから始まります。マタイによる福音書9章35節の言葉です。「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。」

イエス様の公的な活動は、主に町や村を回り、御国の福音を伝え、人々を癒すことでした。ここで御国の福音というものは、人々が知らない神様の言葉であるよりは、神様の言葉を正しく解き明かすことだと思います。例えば、現在の説教のようなものだと思います。すなわち、イエス様は町や村を回われ、説教され、病気や悪霊に取りつかれた人々を癒されたのです。そして、今日の福音書でもこれと同じことをなさいます。ところが、今日の福音書では、イエス様がご自分のところに集まって来る群衆を見て、特別な感情を覚えたと書いてあります。36節の言葉です。「また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれました。」イエス様は群衆を見て深く憐れまれました。彼らが飼い主のいない羊のように打ちひしがれていたからです。

イエス様が群衆を憐れまれたのは、彼らが貧しいからでも、病気にかかっているからでもありませんでした。彼らに神様の言葉を正しく教え、彼らを導く飼い主のような人がいなかったからです。先週の福音書でイエス様は「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである(13節)」と言われ

ました。そしてイエス様は、徴税人と交われ、出血の病を患っている女と死んだ少女のところに行かれました。この3人には、共通点の一つありますが、それは、彼らが律法に触れる人々であったということです。だから、彼らを非難して避ける人はいましたが、彼らと共にいて、助ける人はいませんでした。しかし、イエス様は、みんなが避けている人々のところに行かれました。飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている彼らと共におられ、彼らを癒され、生き返らせました。彼らの飼い主になってくださったのです。そして、彼らのような人々が多くいたので、今日の福音書の言葉のように、イエス様は彼らを憐れまれ、彼らのために弟子たちをお遣わしになります。ここで弟子たちは、初めて使徒と呼ばれます。その理由は、弟子たちがイエス様の命令によって、イエス様が定められた人々のところに行ったからです。彼らを回復させるために、彼らをイエス様に導くために、弟子たちは使徒となり、イエス様に遣わされたのです。

そのために、イエス様は弟子たちに権能をお授けになります。今日の福音書10章1節です。「**イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであった。**」当時のアポストロスと呼ばれた人々は、王などの指導者の命令によって遣わされたので、彼らは遣わされた場所で王の役割を果たしました。弟子たちがイエス様の権能を授けられたのも、これと同じ文脈だと思います。弟子たちは遣わされた場所でイエス様の役割を果たさなければなりませんでした。それで、弟子たちに権能が授けられ、弟子たちは、イエス様のように汚れた霊を追い出し、あらゆる病気と患いを癒すことができたのです。イエス様の御名によって人々の飼い主になったので、イエス様の権能も行うことができたのです。弟子たちの力ではなく、イエス様の派遣の力だったということです。

2節以降では、12人の使徒たちの名前が書かれています。この名前をよくご覧ください。ペトロ、ヤコブ、ヨハネのような優れた弟子だけでなく、召されたばかりのマタイ、疑い深いトマス、熱心党のシモン、イエス様を裏切ったイスカリオテのユダの名前も入っています。イエス様は、優れて熱意がある弟子たちだけを使徒としてお遣わしになったわけではありません。弟子たちみんなに、さらに凶らずも弟子になったマタイやご自分を裏切ることになるイスカリオテのユダにも、権能を授けられ、使徒として遣わされました。これは、使徒の基準が弟子たちそれぞれの信仰の成熟度や人格や信仰生活の年数とは関係ないということだと思います。イエス様の命令が大事で、遣わされたということが重要なのです。私たちはこれを忘れてはいけません。

イエス様は、使徒たちを異邦人やサマリア人のところではなく、イスラエルの家にお遣わしになります。なぜ、異邦人のところではなく、イスラエルの家にお遣わしになったかは、よく分かりません。おそらく、律法と神様の言葉が最も曲がっているところが、当時のイスラエルだったからではないかと思います。曲がった言葉によって、飼い主のいない羊のような人が多いところ、イエス様は、そこにご自分の使徒たちをお遣わしになったと思います。そして使徒たちは、そこで「天の国が近づいた」と伝えるのです。病人を癒し、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を取り払うのです。しかし、このすべてのことに代価を受けてはいけません。イエス様が「**ただで受けたのだから、ただで与えなさい**」と命じられたからです。使徒として遣わされた弟子たち、彼らがしなければならないのは、ただ命令に従うことだけなのです。

私たちは、毎週の礼拝の際に使徒信条を告白しています。今日も、使徒信条によって私たちの信仰を告白しました。なぜ私たちは、使徒たちの信条によって私たちの信仰を告白しなければならないのでしょうか。それは、私たち一人一人も、小さな使徒としてイエス様に召されたからです。私たちが偉くて、私たちの霊的な力が優れて、召されたわけではありません。この世のことを御覧になり、深く憐れんでおられるイエス様が、私たちを使徒として召されたので、私たちがこの場にいるのです。そのため、私たちの信仰の年数が長くても、短くても、洗礼を昨日受けても、何十年前に受けても、まったく関係はありません。今日の福音書の使徒たちの名前を見てください。つい弟子になった使徒もあり、イエス様を裏切る予定の使徒もあり、熱心党である使徒もあります。だから、使徒の資格や能力は、全然重要ではありません。ただ召されてお遣わしになった方とその方の命令に従うことが重要なのです。そして今日も、私たちは礼拝の終わりの部分に派遣の言葉を唱えるのです。私たちが誰によって遣わされたか、誰のために送られたかを覚えてください。すべてのことは、イエス様が行ってくださるのです。私たちは、ただイエス様が行われることを期待したら十分なのです。イエス様が飼い主のいない人々の真の飼い主になってくださいますように祈ります。アーメン